

ブルデュー社会学と美術史研究

——ハビトゥス概念の形成過程にみる現代的可能性——

神奈川工科大学 三浦直子

1 目的

この報告の目的は、ブルデューの研究手法の特徴を抽出し、現代の理論・実証研究へ応用するヒントを得ることにある。例えば、統計技術と行動科学の発展は、人々の行動を客観的に予測可能にすると期待される一方、自由や人間らしさを侵害すると危惧されている。こうした今日の社会的・学問的な対立状況は、ブルデューが独自のハビトゥス概念を展開した 1960 年代の客観主義と主観主義の対立状況に相通的であるといえる。本報告では、主客対立の超克を目指し、ブルデューがどのように美術史研究を取り入れたのか、その理論的・方法的な特徴を分析する。

2 マリシャル論文からの影響

ブルデューは、自ら仏訳して刊行したパノフスキーの『ゴシック建築とスコラ学』の文末に解説を付して、モースの定義から離れた独自のハビトゥス概念を展開している。加えて、パノフスキーが用いた「**mental habit** (精神習慣)」にラテン語の「**habitus** (ハビトゥス)」を当てたマリシャルの論文を、解説の中で長文引用している。パノフスキーに着想を得たマリシャルは、詳細な史料に基づき、中世ヨーロッパの建築と書体に共通する特徴を説明すべく、スコラ学の教育を介して習得される集団的な嗜好 (**goût**: 趣味) の存在を描出した。マリシャルの研究手法や理論枠組みは、ブルデュー社会学に継承され、文化・階級の実証研究へと展開されたと解される。

3 パノフスキーの美術史研究からの影響

ブルデューがパノフスキーから受けた主要な影響の 1 つは、認識様式への着目である。パノフスキーが構想した美術作品の意味理解の諸段階を、ブルデューは社会階級の知覚図式の差異として導入し、芸術鑑賞の階級格差を説明する。2 つ目は、その理論構築である。パノフスキーが美術作品の時代区分に用いた「時間軸」における範囲画定の認識作用を、ブルデューは「空間軸」に導入し現代フランスの階級構造と象徴闘争の分析へと応用する。更にパノフスキーは、時代区分の根拠に同時代の社会状況へ言及し「空間軸」における教育の作用に注目した。同様にブルデューは、階級区分の根拠に身体化された歴史というハビトゥスの「時間的」側面を導入している。

4 結論

以上から、ハビトゥス概念展開の中核に、美術史研究の成果が意図的に導入されていることは明らかと考える。主客対立の超克を模索したブルデューにとって、諸作品の全体を把握し、全体の中に個別の作品を位置づける美術史の視点、構造の生成原理をも射程に入れたパノフスキーの視点は、大きな示唆を与えたといえる。他領域の研究成果を注意深く精査し、生成原理の水準で取り入れるブルデューの研究手法は、現代の理論・実証研究においても有用なものといえよう。

文献

- Panofsky, E. (traduction et postface de P. Bourdieu), 1967, *Architecture gothique et pensée scolastique*, Minuit. (cf. 『ゴシック建築とスコラ学』前川道郎訳, ちくま学芸文庫, 2001.)
- Marichal, R., 1963, 'L'écriture latine et la civilisation occidentale du I^{er} au XVI^e siècle' in Centre international de Synthèse, *L'écriture et la psychologie des peuples*, XXII^e semaine de Synthèse, Armand Colin.